

[同窓会事務局より]

支部活動の助成について

次のとおり支部活動を助成します。幹事、あるいは岡山工学振興会内・岡山大学工学部同窓会(086- 255- 8311)へ御連絡ください。

- (1)100人程度を超えるような支部が総会、懇親会等の活動を行う場合に助成する。
- (2)通信連絡に必要な経費として 180円 / 人・回を助成する。
- (3)懇親会等の会合に要する経費として 50,000円 / 会を助成する。

同窓会報への寄稿などのお願い

会員方々の寄稿、意見等をお寄せくださいますようお願いいたします。

- ・職場報告：600～ 1200字程度
 - ・会員グループ報告：600～ 1200字程度
 - ・最近の研究から：8000字まで(図・表を含む)
 - ・会員短信：800字以内(近況、随想、会員や恩師への祝辞、思い出等)
 - ・通信：400字以内
- いずれも写真(顔写真あるいは関連写真)を合わせてご提供ください。

なお、いずれの寄稿につきましても、編集幹事一同の判断により、紙面の都合上内容を損なわない範囲で一部を変更、削除させていただくこと、また極端に内容が不都合であるものについては掲載をしないこと、などをさせていただいておりますので御了承をお願いいたします。

同窓会名簿購入のお願い

平成 13年 3月発行の同窓会名簿(5,000円送料込み)の残部がありますので、ご希望の方は同窓会事務局(086-255-8311)まで。

編 集 後 記

岡山大学工学部同窓会報第 14号をお届けします。この度平成 14年 3月をもちまして機械工学科中島利勝先生のご退官されました。長年中島先生がなされた研究、教育におけるご功績、さらには本学へのご尽力に対して深く尊敬と感謝の意を表しますとともに、これからもご健康に留意され益々ご活躍されますことをご祈念申し上げます。また、ご多忙な中本稿へのご寄稿のために貴重な時間を割いていただきましたことをあらためてお礼申し上げます。また、中島先生のご退官に寄せてメッセージをいただきました塚本真也先生に感謝申し上げます。

今年度の学科紹介は物質応用化学科と電気電子工学科にお願いし、職場紹介では機械工学科及び電気電子工学科卒業のお二方からご報告をいただきました。巻頭文をご執筆いただいた東辻浩夫学部長をはじめ、これら原稿を快諾いただいた、阪田祐作先生、奈良重俊先生、光田司氏(株式会社ジャパノエナジー)、奥山浩志氏(三菱自動車水島製作所)に感謝申し上げます。

国立大学の独立行政法人化も間近にせまりつつあり、工学部では教育システムの改善に向けての取り組みを行っております。同窓生の皆様にもその状況を知っていただきたいと考え、本稿では、JABEE日本技術者教育認定機構の審査を目指しての状況、学習等達成度記録簿および教育賞制度の導入についての記事を掲載しております。また、工学部同窓会の活性化のための取り組みとして、本会報だけではなく電子メール、ホームページによる情報発信を考えております。現在の状況についての記事を掲載しておりますのでご参照をお願いいたします。情報通信技術の発達により皆様の側からの情報発信も容易になってきております。さらなる同窓会の活性化のためには皆様のご理解、ご協力が不可欠です。メール、ホームページ、お便りなどを通じまして、本同窓会、本会報に対するご意見ご要望などをお寄せいただけましたら幸いです。

編集・発行 / 岡山大学工学部同窓会事務局 〒700-0081岡山市津島東 2丁目 7番 17号 エクセレント津島 A20号 ☎(086)255-8311
印刷所 / (株)廣済堂 岡山営業所 〒700-0985岡山市厚生町 1-11-18 ☎(086)227-3339

岡山大学工学部 同窓会報

2002年 11月 2日
(第 14号)

挨拶・寄稿(退官者・社会人) 1- 頁
新任・転任等教官紹介 8- 頁
JABEE本審査に向けて 14頁
学習等達成度記録簿の導入 15頁
同窓会ホームページリニューアル 19頁

「同窓会からの期待、同窓会への期待」

工学部長 東 辻 浩 夫

岡山大学工学部は創設から既に42年を経て、同窓生は約1万2千名の多数を数えるに至りました。まず何より、皆様の各方面におけるご活躍に深く敬意を表します。貴重な紙面を与えられましたこの機会に、工学部の近況をご報告してご理解を賜りますとともに、これまでも増したご支援をお願いしたいと考えております。

工学部の置かれた状況の最も大きな変化は、新聞報道その他でご存じのように、すべての国立大学が平成 16年4月を目途に独立行政法人(本学の場合は独立行政法人「国立岡山大学」)となることです。この法人化により、現在、国から支給されている教育研究の費用は人件費を含めた運営交付金となり使途は大学の裁量によることになる、教職員は非公務員となる、学費についても裁量の余地が生じる等々、制度の

さまざまな変更が予想されています。

詳細については現時点では不明の点多いのですが、一言でいえば、この変化により独立採算を念頭に置いた運営が可能になると捉えることができます。現在、工学部を含む全学で、法人化に対応した新しいシステムをどう構築するかを検討しているところで、問題点を含んでいたにせよ、これまで機能してきた国立大学のシステムを大幅に変更する訳ですから、移行には大きなエネルギーが必要です。工学部としては、研究、教育、社会貢献が学部の実務であることはこれまでと変わりがない、また、これらの達成には新しい制度のメリットが大であるという立場で、極端な理想論に走ることなく、法人化によって生じる自由度を活かした、足を地につけた改革に力を注ぎたいと考えています。

研究活動は大学院、特に博士課程を中心として行われています。工学部につながる博士課程が設置されてから既に20年近くになりますが、平成 11年度からは博士前期課程(修士課程)および博士後期課程(博士課程)からなる区分制の大学院自然科学研究科が設置され、今年度で後期課程の学年進行為終了します。後期課程は8専攻から構成されており、その内の5専攻に工学部の各学科が含まれています。基礎的な研究から応用研究までの幅広いテーマが研究されており、文部科学省の科学研究費補助金(科研費)をはじめ、共同研究、受託研究、奨学寄付金などの外部資金にも支えられています。同窓生には、社会のそれぞれの分野で、指導的な立場に立つておられる方々も多いことと思います。工学部の研究成果について広く知っていただき、産学連携の推進にご協力を賜りたいと考えております。また、大学院では、社会人の方がそれまでの専門分野をさらに究める、あるいは、少し違った方向に専門を広げるなどの目的で博士後期課程を利用するための便宜を図るべく制度を整えようとしています。是非、博士後期課程を専門の学術・技術に関する相談の場、人材育成の場、人材の源として活用していただきたいと思っております。

教育面においては、各学科の教育プログラムにおいて不断の改善が行われています。特に、機械工学科、電気電子工学科、システム工学科は平成 13年度の日本技術者教育認定機構(JABEE)の試行審査を受け、本審査を受審するのに大きな問題なしと判定されました。この過程で、学生の視点に立った様々な改善の余地が判明したことは大きな収穫でした。他の4学科においても、審査を受け得る態勢の整備を急ぎたいと考えています。

以上、限られた点のみご報告いたしました。工学部の3つの使命のどれにおきましても、独自の財政基盤をもつことの意義は非常に大きいと思われま。法人化によって生じる自由度を活かして、財政基盤を固める方策を検討したいと考えている次第です。

同窓生の皆様には工学部に対するさまざまなご要望・ご期待、あるいは、ご叱責の声があることと思います。どうか、忌憚のないご意見をお寄せいただきたいと思います。

最後になりましたが、皆様のますますのご発展とご健勝を祈念してご挨拶と致します。

「長い一瞬」

中 島 利 勝

私が岡山大学工学部に赴任したのは昭和 48年 10月で 36歳の時である。まだ教育者・研究者として大学教官が社会に対して果たすべき役割など全く認識していなかった。ただ新しい事実を発見出来る研究活動が楽しくて仕方がなかった頃である。あれから 29年の長い歳月が過ぎたが、今から思えば、「一瞬」であったような錯覚を感じる。

赴任後の私が真っ先にしなければならない事は、教育研究活動の拠点となる研究室の構築であった。当時の研究室には、機械工学科の先輩教授の御配慮により十分なスペースはあったが、研究設備どころか釘一本なかった。その上、私の講座は正確には新設講座ではなかったが、学科の事情で新設講座と同等の扱いであったにも拘らず新設設備費はほとんど無く、また研究課題を探求する上で私の「精密加工学」研究室に必要な基盤研究設備は、約 3年分の全校費を必要とするほど高価であった。このような状況下での研究室整備は、いまとっては懐かしい思い出の一つであるが、当時は夢でうなされるほど大変な事であった。「窮すれば通ず」の例え通り、幾つかの企業が研究設備の貸与を申出て下さり、当面の研究活動が出来るようになった。数名の教職員と20名余りの大学院生・学部学生の研究活動を何とか支える研究設備を整備するには 5- 6年の歳月を要した。それ以来も研究設備の整備充実にはずっと特に予算面で苦労した。

教育面においては、機械加工学分野での講義および研究指導を通じて、高度課題探求能力によって博士、修士、学士の学位を取得した数多くの人材を育成したが、講義や研究指導を行うに当たって一貫した事は、学生が興味を失う事がない様に、「面白おかしくユーモアたっぷり」と言う事だった。教育される側の学生が興味を失えば教育効果は半減するからである。

研究面においては、国際的に通用する独創的研究を行う事を常に第一目標としてきた。昭和 42年 6月から 15ヶ月間客員研究員として留学していた米国シンシナティ大学において、「高強度耐熱合金の精密加工に関する国際共同研究」を推進すると共に、帰国後も米国生産工学会等主催の国際研究集会に度々参加して研究成果を発表し、また諸外国の大学および企業の研究者と学術交流を行うことによって、研究論文の国際的レベルの維持につとめた。さらに、我が国における国際研究集会を積極的に推進し、生産工学に関する国際会議や切削研削に関する国際会議を実行委員として企画開催する等の国際交流活動を行い、研究のレベルアップに努力した。

私が大学教官であった頃から退官後の現在に至るまで積極的かつ意欲的に取り組んでいるのは、地域社会との連携・交流すなわち地域企業への貢献である。自分の専門分野は「工学」特に「精密加工学」であり、生産現場と密接に結びついている学問分野である。従って、研究成果としての「生産理論」が生産現場で通用しなければ机上の空論でしかないのは理解していた。しかし、大学研究者の確立した生産理論を生産現場に応用出来るように消化解釈するのは企業技術者の役割であり、大学研究者が研究論文を発表する時、正しい生産理論であれば易しくなくても良い、と若い頃は考えていた。その頃、「先生の研究論文は難しい」と企業技術者からよく指摘された。暫らくして企業技術者は日常的な生産活動に忙殺され、新しい生産理論を咀嚼消化して現場に応用していく時間的余裕が無い事に気づいてから、出来る限り理解しやすい研究論文を書くように努力した。これが地域企業への貢献の第一歩である。また、私はかねてより「地域企業が新しい社会ニーズに応えられるように発展し、あるいは新しい産業として生まれ変わるためには、技術移転、技術交流、新技術導入などによって、企業自体が有する産業技術を高度化・先端化することが必要不可欠である」という考えを持っている。そのような観点から、新しい技術が普及し始める際には地域企業をもって技術研究会を設立して、新情報講習会、先端技術研修会等を開催し、地域企業技術の高度化・先端化を図り、もって地域企業の活性化と産業振興に努力してきた。それら幾つかの技術研究会の中には現在まで続いている研究会もある。退官後の現在も、大学研究者であった時に確立した自分自身の精密生産理論を検証するために、幾つかの優秀な精密生産企業にお邪魔している。

以上のように、大学教官であった頃から現在に至るまで、研究活動を基礎として教育活動、国際貢献、地域社会への貢献等を行ってきたが、それは自分にとっては「長い一瞬」であった。

「中島利勝先生のご退官によせて」

機械工学科 塚本真也

中島利勝先生は平成 14年 2月 日に満 66歳の誕生日を迎えられ、岡山大学の規定により、本年 3月 3日をもって岡山大学をご退官されました。

先生は、昭和 38年 3月京都大学工学部をご卒業後、三井金属鉱業株式会社勤務を経て、昭和 40年 1月京都大学工学部助手に着任されました。京大時代の昭和 42年から 43年に掛けて、米国シンシナティ大学客員研究員として留学され、そこでは宇宙開発アポロ計画に参画して、高強度耐熱合金の精密研削加工に関する国際共同研究を推進されています。昭和 48年 10月岡山大学工学部助教として着任し、翌年工学部教授に昇任し、機械工学科機械加工学講座を担当されました。

研究面においては、精密生産を遂行するうえで中核的かつ最重要である研削加工技術の研究を行い、新研削理論を確立することによって精密加工技術の高度化を実践されてこられました。先生の研究成果は、情報技術、エネルギー転換技術、環境制御技術、バイオ技術等の先端技術を支える基盤技術としての精密加工法の高度化につながる重要な研究であるとの高い評価を受け、日本機械学会賞、精密工学会賞、電気加工学会賞、高度自動化技術振興賞、工作機械技術振興賞等多くの学術賞を受賞されています。

教育面においては、機械加工学分野での講義および研究指導を通じて、研究者を育成するとともに、各国の外国人留学生も育成され、先生のご指導のもと多くの有意な人材が輩出されています。また、これらの教育分野のご貢献が評価され、平成 9年には、日本工学教育協会賞を受賞されました。

大学行政面においては岡山大学評議員、工学部長を歴任し、学部長の任期中には機械工学科を改組してシステム工学科を設置するためにご尽力されました。工学部長ご退任の 1年後、今度は大学院自然科学研究科長として自然科学系5学部の大学院自然科学研究科の改組拡充にご貢献されました。

学会活動としては精密工学会副会長、同理事、同評議員、同中国四国支部長、日本機械学会評議員等の役職をご歴任され、斯界における国内外の権威者としてご活躍されるとともに、国際的学術交流を積極的に進められています。

他方、地域社会との連携・交流については、岡山県精密生産技術研究会会長および岡山県レーザ加工技術研究会顧問として、県内企業の当該分野技術の高度化に積極的に取り組み、県内企業の精密生産技術を我が国で屈指のレベルまで向上させるのに著しくご貢献されています。加えて、広島県高品位加工技術研究会顧問、おかもま科学技術フォーラム代表幹事等を歴任し、常に地域産業の振興に幅広い識見と卓越した洞察力をもって取り組んでおられます。

以上の研究教育・大学行政ならびに社会へのご貢献の極めて輝かしいご功績により、平成 13年 1月には栄誉ある山陽新聞賞を受賞されました。

先生は、本年ご退官後、4月岡山大学名誉教授の称号を授与され、現在は悠々他適(自適ではなく、他適=他者へ適するよう)な生活をなさっておられます。この度のご退官にあたり、先生のご功績とご尽力に対して深く尊敬と感謝の意を表するとともに、これからもご健康に留意され、益々ご活躍されますことをご祈念申し上げます。

「物質応用化学学科の近況」

物質応用化学学科科長 阪田 祐作

本工学部同窓会報の10号(平成 10年 1月 日)に「精密応用化学学科について」と題して、田中善之助教授が学科の状況を報告されて以来、4年が経ちました。その間、精密応用化学学科は、平成 12(2000)年 4月に、物質応用化学学科に改組されて、物質反応化学と物質物性化学の 2大講座に再編成されました。教員組織の構成は本年 1月 日現在で、表のようになっています。教育研究分野は、旧来の講座名に相当するものです。

工学部もすでに創立 40年式典を終えました。卒業されて時間がたった同窓生の方には、学科名も研究室名も変わってしまい、自分の出られた研究室が現在どうなっているかわからないという悲しい声を聞くときがありましたので、この場を借りて、少し学科の変遷を整理してみます。

工学部に初めて化学系学科として工業化学科が設置されたのが、創立と同時に、1960年でした。次いで高度経済成長の波を受け、1966年に合成化学科が設置され、その後この 2学科体制が約 20年続きました。この間の 1973年に設置された非結晶材料研究施設とこれら 2学科が合併して、1987年に精密応用化学学科に統合されました。そして今回 2000年の物質応用化学科への改組(学生定員 60名)に至りました。因みに学科名の英文表記は、精密応用化学科も物質応用化学科も同じで、Department of Applied Chemistryです。関連する生物応用工学科の新設(1987年)や環境理工学部への学生定員と学科教官の一部移行(1994年)さらに大学院修士課程が博士前期課程(物質生命工学専攻)へと改組(1999年)されるなどの関係を辿りますと、学部や学科組織としては、時代とともに大きく変化していることを理解いただけると思います。

さて現在の物質応用化学科の話に戻って、教員構成表に至った人事事項を簡単に紹介しておきます。酒井貴志教授(合成有機化学)の昇任(平成 11年 5月)がありました。生体触媒化学の進歩に大変貢献されました宇高正徳教授が、平成 12(2000)年 3月に定年を迎えられて名誉教授になられました。是永敏伸助手(東工大博士課程修了)が平成 13年 4月に着任(合成有機化学)。M. d. A zhar Uddin助手(触媒反応化学)がオーストラリアの University of New castlに転出(平成 14年 1月)。田中秀雄教授(分子変換化学)が昇任(平成 14年 2月)。天野英一郎技官が退官(平成 14年 3月)。依馬正助教授(合成有機化学)が昇任(平成 14年 7月)。押木俊之講師(有機金属化学)が昇任(平成 14年 7月)。Thalada Bhaska助手(元インド化学技術研究所からの岡山大学 VBL 非常勤研究員)が平成 14年 1月に着任(触媒反応化学)。このように当物質応用化学科では、ここ数年、次々と人事が進んでおり、これらが教育と研究の新しい波と躍進へのバネでありたいと願っています。

物質応用化学科は理学部化学科と組んで、世に言われるところの TOP30に入るべく、文部科学省の COE に応募いたしました。結果はご承知のことかと思いますが、残念ながら採択されませんでした。学科として反省すべき点は反省し、今後の大学の独立法人化に向けて、学科の教育と研究のポテンシャル向上に、一層の努力と精進を続ける所存です。同窓生の皆様のご支援とご鞭撻をお願いいたします。

最後に悲しい報告があります。笠岡光成名誉教授が、本年 2月 2日に亡くなりました。笠岡先生は昭和 43(1968)年から平成 5年(1993)まで、ほぼ半世紀にわたって、合成化学科、工業化学科、精密応用化学科で化学工学と化学反応工学関連の講義を担当され、環境保全触媒の研究で顕著な成果を挙げられました。講義や実験でいろいろ思い出をお持ちの同窓生も多いことと思います。皆様とともにご冥福を祈りたいと思います。合掌。

物質応用化学科 教育研究組織 *講師 平成 14年 1月 日現在

大講座名	教育研究分野	教授	助教授	助手
物質反応化学	合成有機化学	酒井貴志	依馬 正	是永敏伸
	有機金属化学	高井和彦	押木俊之*	稲葉雅美
	分子設計学	宇根山健治	片桐利真	網井秀樹
	分子変換化学	田中秀雄	黒星 学*	
物質物性化学	触媒反応化学	阪田祐作	武藤明徳	Thalada Bhaskar
	材料プロセス工学	田中善之助	近藤和夫	押谷 潤
	界面設計制御学	田里伊佐雄	林 英考*	武田真一
	有機材料化学	島村 薫	沖原 巧*	内田哲也
	無機材料化学	高田 潤	藤井達生	中西 真

「学科の最近の話題」

電気電子工学学科科長 奈良 重俊

冒頭から私事にわたって恐縮であるが、私が学科に勤務したのは 1990年のことである。当時助教授として赴任し、1995年には広島大学に教授として転出した。もう戻ることはないかと思いきや諸般の事情で、1999年に再びこちらに戻ってきた。このたび同窓会から依頼を受けて学科の最近の話題について書くようにとの要請をいただいたが、上のように渡り歩いてきた小生のこと、学科に関する長い歴史を知らぬまま最近起きている出来事の中からつれづれなるままに拾って雑文として書くことにしたものである。読者にはそれをあらかじめご了解のうえ目を通していただければ幸いである。

学科の話題としてはやはりまず第一に電気電子工学を全体的に見たときの時代の流れの変化である。学科としての主たる役割は時代の最先端を行く技術の基礎を教育すると言うものであり、これは伝統的に変わりはない。しかしそれを取り巻く電気電子工学の学問的・技術的な状況は確実に変貌しており、特にシステムの的な見方や思考が求められていると捉えられる。一言以上前の流行語に「私作る人・私使う人」というのがあったが、今は一般のユーザーの立場で考えて良いかもしれないが、少なくとも電気電子工学を学ぶ人々にとっては望ましくはない考えである。たとえばごく狭い分野の物性やデバイスを研究する立場の人でも常にそれを、様々な機能単位を集積化してできるシステムに組み上げたときのシステムの機能とつなげて考えなくてはならない時代背景が具現化していると思われるのである。その背景はもちろん、ハード的な半導体技術とソフト的な情報処理技術の恐ろしいほどの発展と融合から生み出されたものである。この両者は深く関わっており、産業の現場では上に述べた作る人と使う人との間の壁を完全にとりはらったいわゆる IT 技術が更なる発展を続けている。こうした中で、主としてアメリカからおしよせるグローバルスタンダードの奔流が実力主義・能力主義の衣をまとって押し寄せてきている。そのなかで電気電子工学科の教育をどう行っていくのかどうかが現在の学科の頭を悩ます重い課題となっているのである。そうした状況に対応して、学科内では昔には歴然としてあった「旧電気系」・「旧電子系」の垣根を意識して下げて学科としての一体感を醸成し、また学科としての特徴を打ち出そうという方向に努力しようとの活動が進められている。昔卒業された同窓のお仲間の方々にはこれも話題として感じられるかも知れない。

先に述べた世の中の激しい社会変革と同時進行で経済的不景気の雰囲気蔓延しているが、目を転じて電気電子工学科の卒業生あるいは修士課程修了生を見ると、まだ天国のような就職状況である。毎年減り気味とはいっても定員の 10倍近い求人があるのは事実であるし、小生の個人的な経験を踏まえてこの 2ないし 3年間を見るかぎり電気電子工学科の就職状況の良さは全く変わりはないと思われる。しかし学生・院生を見る産業界の目は上記の社会変革を背景に確実に厳しくなっており、学科の推薦状がもう黄門様の印籠では全く無く、どんどん落ちてくる学生・院生が多くなっていることも事実である。また社会状況の時代の流れを背景にした若者の気質の変化も大きなものであり、就職後の早い段階での離職・転職も求人に来られた企業の方々とは話題になることも多い。そのあたりは昔卒業された同窓生の方々には隔世の感呼び起こすかもしれない。

そうした社会の現状に加えて大学の独立法人化とともに国立大学の組織およびその運営形態が激変を迎えるときがすぐそばに迫っている。若い方々にとってできるだけ過ごしやすく、将来に希望の持てる形で後を託すことができるようにするべく努力はしているつもりであるものの、ままならないのが現状であると白状せざるを得ない状況である。

つれづれなる最近の話題記とは別に、最近の教育研究分野の構成をお知らせすることが会報として同窓のお仲間最新の情報を伝える役割の一部であると考えられるので、以下に簡単に記しておこう。読者の皆様におかれましては下記から教官や職員の変動を捉えていただきたい。

電気システム工学講座

電力工学(高橋則雄教授、藤原耕二助教授、宮城大輔助手、中野正典技官、小林敦子事務補佐員)

電気機器学(村瀬 暁教授、小笠原悟司助教授、小松原均技官、塩屋綾子事務補佐員)

電子計測学(小西正躬教授、今井 純講師、西 竜志助手、安原清隆技官)

電子システム工学講座

電子機器学(公募による選考過程が進行中)

電子回路工学(野木茂次教授、佐藤 稔講師、藤森和博助手、山下知子事務官)

【厳密に言うと、野木教授と佐藤講師は大学院自然科学研究科の専任であり、学部は兼任である。】

電子物理学(東辻浩夫教授、鶴田健二助教授、東辻千枝子助手、藤澤悦子事務官)

そのほかに現在チコ・バイヤンケール講師が専門英語講師として平成 14年度まで在任中

知能デバイス工学(奈良重俊教授、長屋智之助教授、西川 亘助手)

材料物性学(上浦洋一教授、山下善文講師、石山 武助手)

「職場報告」

株式会社 ジャパンエナジー
精製部門 エンジニアリングセンター精製技術グループ
光 田 司(平成 5年 4月 工学研究科
機械工学専攻修了)

日本鉱業株式会社は、1905年に久原房之助が、日立鉱山を買収し操業を開始したのが始まりでした。その後、1912年に久原鉱業株式会社を設立、1928年に日本産業株式会社と改称し、1929年に日本鉱業株式会社を設立しました。1939年に現在の中核事業の1つである石油精製業に進出、1992年に共同石油株式会社と合併し、精製と販売が一体となった株式会社日鉱共石として新たに発足しました。そして 1999年に現在の株式会社ジャパンエナジーに社名変更しました。皆さんには、会社名が先「JMO」というブランドネームの方が親しまれているのではないかと思います。ちなみに、この「JMO」とは「Joy of Moring」を表しています。

当社の主な事業内容は、石油精製業、石油製品販売業、電子材料販売業であります。また、当社グループ会社の事業には、石油資源開発・調達・貯蔵、陸海運・荷役、電子材料といったものから、株式会社 am / pmジャパンや株式会社ジャパンによる流通サービスまで幅広いものとなっております。

私は、1993年の入社以来、石油精製の部門に所属しております。当社グループの主な製油所は、かつては、水島、鹿島、知多の3製油所でした。私はその中の知多製油所に入社から約 8年間勤務しました。そして社内の変革に伴い、200年に知多製油所は操業変更を行い、原油精製処理を中止しました。このときに私は慣れ親しんだ知多製油所を離れ、時をほぼ同じくして設立された精製部門エンジニアリングセンターに異動し、現在に至っています。

以前の部署でも現在の部署でも、私は保全部門に所属し、プラント設備のメンテナンス特に検査業務に携わっております。プラント設備の検査と申ししてもとてとこられない方もいらっしゃると思いますので少し説明をしますと、装置産業である石油精製業では「定期修理工事」を中心に動いております。装置運転中にも検査や保全を当然行っているのですが、主には定期修理工事中に検査や保全を実施します。このため、私の業務の1つには次回の定期修理工事で、どこをどのように検査するか、または取替や補修をするかという計画立案と、定期修理工事における実行が挙げられます。

また、我々保全部門に求められる事項としては、危険物を扱う製油所であるためトラブルゼロでの安全安定操業の達成、そして昨今の経済の状況を反映して保全コストの更なる削減が求められています。そこで、設備や機器の余寿命診断や劣化診断といった検査技術の重要性がますます高いものとなっており、こういった検査技術の開発、調査も保全部門の重要な業務の1つであります。

最近では法規制の緩和に伴い、高圧ガス保安法や電気事業法などにおいて、検査周期の延長が認められるようになってきており、定期修理工事の周期も2年から4年と延長されてきております。こういった面からも検査技術の開発、調査といった業務は重要性を増しています。

石油産業を取り巻く環境は厳しさを増しており、必ずしも明るい未来ばかりとはいえませんが、当社はサルファリーの燃料油(硫黄分の少ない燃料油)の販売を同業他社に先駆けて決意するなど環境面にも優しい企業であることを目指しています。

最後になりましたが、現在、私の勤務している水島製油所は、岡山県内にありますので、興味のもたれた方は一度製油所見学にこられるとよいと思います。

「職場報告」

三菱自動車水島製作所
総務部環境・資産管理Gマネージャー
奥 山 浩 志(昭和 57年 電気工学科卒)

三菱自動車工業はご存知のとおり三菱重工の自動車部門として育ってきました。自動車生産の歴史は古く1917年(大正6年)に、我国初の量産乗用車“三菱A型”の製作を開始しました。当時自動車先進国であったイタリア車を参考に試作を含め22台を192年までに製作しました。私の勤務する水島製作所は1933年(昭和18年)9月三菱重工の水島航空機製作所としてスタートし一式陸攻と呼ばれる中型爆撃機等を約500機生産しました。その後終戦を迎え進駐軍用のロッカー等を生産する時期を経て、本格的に自動車(オート三輪)を1938年(昭和2年)から生産開始しました。1970年(昭和49年)6月に三菱重工から独立し、三菱自動車工業(株)が発足しました。水島製作所では1987年10月に製作所での生産累計1,000万台を達成し現在までに(2002年3月末)累計2400万台を生産しています。

現在水島製作所ではミニカ、トップB、EKFワゴン、パジェロミニ、ミニキャブ、タウンボックス、ランサーセディア、セディアワゴン、ディンゴ、ディオン、エアートレック、デリカスペースギアの完成車およびノックダウン車を938万台/年生産(2001年度)また軽四輪用の660CCのエンジンおよびトランスミッションと1500CCクラスのエンジ

ンとマニュアルトランスミッションを生産しています。01年度の生産台数は完成車として軽四輪が26万台乗用車が23万台また、海外工場で完成車とするための部品輸出が44万台分の生産を行いました。

水島製作所ではエンジン、ミッションの鋳造鍛造・機械加工・組立、車体は板金・溶接組立・塗装・組立まで一貫した生産ラインを有しており世界でもまれな工場です。また英国の経済専門誌で世界の自動車工場における生産性を一人あたりの生産台数で比較しておりますが、当所は2年連続で世界一の生産性と評価されております。

製作所の説明はこれくらいにして、私の仕事内容をご紹介します。私は昭和57年に岡大電気工学科を卒業し当所の生産技術部工場整備課に配属されました。この課は全所の設備保全を実施しており、その中でも私は動力設備担当として配属されました。動力設備とは、受変電設備、圧縮空気(コンプレッサ)、ボイラー、廃水処理設備で車を作る会社にながら、ほとんど車とは縁の薄い部署です。入社数年後からは保守だけでなく設備計画も担当させていただき、工場新設とか、新型車の立ち上げのための大幅な工場配置変更等の動力設備計画を担当し現在にいたっております。大学時代は電気主任技術者の資格の事などいっさい考えていなかったのですが、工作上、急に必要となり受験する間もないため、通産局に申請し2種の免許をいただきました。大学時代の取得単位を確認してみると偶然申請に必要な単位を取得しておりスムーズに申請できました。今大学生の方で電気工学科の方は是非今確認し、不足分を取得されてはと思います。私のしりあいで単位が足りずに大学に受講しに行った方もおられますので。

水島地区では、コンビナート地区の電気主任技術者が一同に集まりお互いの情報交換をする場を設けておりますが、私も参加しお互いの事故事例の紹介とか最新技術導入事例の紹介等と懇親会を行っています。水島地区には鉄、ガス、石油、化学、食品等いろいろな業種があり、いろいろな考え方があり私にとって本当に勉強となっております。

最後に、私のような成績の良くなかった卒業生が、電気主任技術者をさせていただき、会社の中だけでは知り合うことのできないかたがたと、いろいろなお話ができて、経験談を伺うことができ、自分の枠を広げることができたのではないかと思います。これから、積極的に自らを新しい場に置き少しでも皆さんのお役に立てることを行っていきたいと思

[新任工学部長の紹介]

平成14年4月1日付け就任

電気電子工学科 電子システム工学講座 教授 東 辻 浩 夫
任 期：平成14年4月1日～平成16年3月31日
平成14年3月31日で任期満了の大崎紘一 前工学部長の後任

[新任評議員の紹介]

平成14年4月1日付け就任

生物機能工学科 生体情報機能工学講座 教授 山 田 秀 徳
任 期：平成14年4月1日～平成16年3月31日
平成14年3月31日で任期満了の吉田 彰 前評議員の後任

[新任教官の紹介]

平成14年4月1日付け就任

電気電子工学科 電子システム工学講座 助教授 長 屋 智 之
教育学部理科教育講座 助教授
情報工学科 基礎情報工学講座 講 師 相 田 敏 明
東京都立航空工業高等専門学校 助教授
電気電子工学科 電気システム工学講座 助 手 宮 城 大 輔
横浜国立大学大学院工学研究科電子情報工学専攻博士後期課程 修了
共通講座 基礎工学 助 手 伊 藤 一 之
東京工業大学大学院総合理工学研究科知能システム科学専攻博士後期課程 修了

平成14年7月1日付け就任

生物機能工学科 生体分子機能工学講座 助 手 工 藤 孝 幸
大学院ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー 非常勤研究員

平成14年10月1日付け就任

物質応用化学科 物質物性化学講座 助 手 Thallada Bhaskar
大学院ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー 非常勤研究員

平成14年11月1日付け就任

システム工学科 システム基礎学講座 助 手 鄧 明 聡
NTTコミュニケーション科学基礎研究所 リサーチアソシエイト

[昇任教官の紹介]

平成14年3月1日付け昇任

物質応用化学科 物質反応化学講座 教 授 田 中 秀 雄
物質応用化学科 物質反応化学講座 助教授

平成14年4月1日付け昇任

システム工学科 システム基礎学講座 講 師 平 嶋 洋 一
システム工学科 システム基礎学講座 助 手

平成14年5月1日付け昇任

生物機能工学科 生物機能応用化学講座 講 師 金 山 直 樹
生物機能工学科 生物機能応用化学講座 助 手

平成14年7月1日付け昇任

物質応用化学科 物質反応化学講座 助教授 依 馬 正
物質応用化学科 物質反応化学講座 助 手

平成14年7月1日付け昇任

生物機能工学科 生体分子機能工学講座 教 授 高 島 征 助
(地域共同研究センター 助教授併任)
地域共同研究センター 助教授
物質応用化学科 物質反応化学講座 講 師 押 木 俊 之
物質応用化学科 物質反応化学講座 助 手

[大学院自然科学研究科(工学部関係分)]

平成14年4月1日付け就任

基盤生産システム科学専攻 知能機械システム学講座 助 手 神 田 岳 文
(システム工学科 システム運用工学講座 兼勤)
東京大学大学院工学系研究科 精密機械工学専攻 博士課程 修了

[定年、転出、辞職教官の紹介]

平成14年1月13日付け辞職

物質応用化学科 物質物性化学講座 助 手 UDDIN MD. AZHAR
University of Newcastle Faculty of Engineering Senior Research Associate

平成14年3月31日付け定年退職

機械工学科 生産工学講座 教 授 中 島 利 勝
自適

平成14年3月31日限り退職

機械工学科 計測工学講座 講 師 CALDIERO ALESSANDRO FRANK
未定

平成14年3月31日付け辞職

機械工学科 計測工学講座 助教授 吉 田 篤 正
大阪府立大学 大学院工学研究科 教授
システム工学科 システム運用工学講座 助教授 宮 本 寛 治
東京都立科学技術大学 工学部 教授
生物機能工学科 生物機能応用化学講座 講 師 足 田 正 喜
関西医科大学 附属肝臓研究所 講師
通信ネットワーク工学科 ネットワーク構成学講座 助 手 五百旗頭 健吾
大学院自然科学研究科 知能開発科学専攻 博士後期課程 復学

平成14年4月1日付け転出

電気電子工学科 電気システム工学講座 助 手 藤 田 英 明
東京工業大学 大学院理工学研究科 助教授
生物機能工学科 生体分子機能工学講座 助 手 石 川 彰 彦
教育学部 理科教育講座 助教授

[名誉教授のご逝去]

笠 岡 成 光 名誉教授 平成14年2月23日(土)ご逝去
笠岡先生には同日付けで勲三等旭日中授章と正四位の叙位が授与されました。

[受賞研究の紹介]

職名	所属学科	氏名	受賞名	受賞日	備考
教授	システム工学科	鈴木 康一	日本機械学会 ロボティクス・メカトロニクス部門 ROBOMEC表彰	13. 6. 9	
教授	電気電子工学科	小西 正躬	計測自動制御学会技術賞	13. 7. 26	
教授	物質応用化学科	田中善之助	200年度実装プロセス工学 ベスト発表賞	13. 9. 28	
助教授	物質応用化学科	近藤 和夫			
教授	情報工学科	金谷 健一	IEEE Fellow	14. 1. 1	
助手	大学院自然科学研究科 (物質応用化学科)	網井 秀樹	日本化学会 第5回進歩賞	14. 3. 27	
教授	機械工学科	吉田 彰	日本機械学会 フェロー	14. 3. 25	
教授	大学院自然科学研究科 (システム工学科)	田中 豊			
助手	電気電子工学科	藤森 和博	電気学会 優秀論文発表賞	14. 3. 31	
教授	機械工学科	吉田 彰	マリンエンジニアリング学会 論文賞	14. 5. 15	
助教授	機械工学科	藤井 正浩			
助手	物質応用化学科	押谷 潤	第9回粉体工学会研究奨励賞	14. 5. 22	
講師	システム工学科	高岩 昌弘	日本フルードパワーシステム学会 学術論文賞	14. 5. 24	
教授	システム工学科	則次 俊郎			
教授	システム工学科	井上 昭	計測自動制御学会 フェロー	14. 8. 6	

[平成 13年度 外部資金受入状況(1,000万円以上)]

(受託研究)

(単位:千円)

研究担当者	委託者	研究期間	歳入金額	歳出金額	研究題目
通信ネットワーク工学科 古賀 隆治	日本学術振興会	134.1~ 14.3.31	66,443	60,403	デジタル回路からの不要電磁波の低減
生物機能工学科 酒井 裕	生物系特定産業技術 研究推進機構	134.1~ 14.3.31	16,276	14,796	環境インパクトの小さい殺虫蛋白質の 動態の解析と害虫防除システムの構築
生物機能工学科 中西 一弘	生物系特定産業技術 研究推進機構	134.1~ 14.3.31	14,776	13,432	熱力学的障壁を克服した機能性食品素材 物質の酵素合成

(共同研究)

(単位:千円)

研究担当者	委託者	研究期間	歳入金額	歳出金額	研究題目
物質応用化学科 高田 潤	科学技術振興事業団	134.1~ 14.3.31	14,900	14,760	革新的多段階窒化処理による極限環境対 応ナノサイズ窒化物粒子分散強化型高度 組織制御高融点金属系複合材料の開発
物質応用化学科 近藤 和夫	超先端電子技術開発機構	136.21~ 14.3.31	10,500	13,044	三次元実装における半導体チップ貫通電極 の穴埋めつき技術の開発

[工学部関係学位授与について]

授与月日:2001年9月30日

【課程博士】

氏名	学位論文名	専攻分野 の名称	専攻名	大講座名	主査教授名
ナ ジョ ン 羅 楨 煥	75 低温電解二酸化マンガン製造の工業化 に関する研究	工 学	物 質 科 学	物 質 開 発 学	田里伊佐雄
オ イ シ 大 石 弘	直径 400mm単結晶シリコンインゴットのマル チワイヤソー切断に関する研究	工 学	生 産 開 発 科 学	機 器 装 置 設 計 学	宇野 義幸
ニ シ ダ 西 田 良 祐	Studies on the Novel High Dielectric Polymers Derived from Cyanoethylated Monosaccharides (シアノエチル化単糖類)誘導された新 規高誘電性ポリマーに関する研究)	工 学	シ ス テ ム 科 学	設 計 ・ 制 御 学	斎藤 清機
ホ サ ム エルディン エルサイ アブデル ガッバル HOSSAM ELD IN ELSA YED ABDEL GABBAR	Design of ComputerA ided Plant Enterprise Safety Management System (CAPE SAFE) in Plant Enterprise Engineering Environment Using Object- Oriented A approach (オブジェクト指向を用いたプラントエンジニア リングにおけるコンピュータ支援安全管理シ ステム CAPE SAFEの構築)	工 学	基 盤 生 産 シ ス テ ム 科 学	知 能 機 械 シ ス テ ム 学	鈴木 和彦

授与月日:2002年3月25日

【課程博士】

氏名	学位論文名	専攻分野 の名称	専攻名	大講座名	主査教授名
フ ク ダ カズヒサ 福 田 和 久	シリコン中の水素関連欠陥の構造と水素の 局所運動に関する研究	工 学	物 質 科 学	物 性 科 学	上浦 洋一
マ エ マサユキ 前 理 之	Effective Synthetic Methods for , Difluoromino Acid Derivatives (, ジフルオロアミノ酸誘導体の効率的合 成法の開発)	工 学	物 質 科 学	反 応 科 学	宇根山健治
チ ョ ウ イ シ 張 一 民	レーザ溶融凝固表面改質層の相分離と界 面形成	工 学	物 質 科 学	物 質 開 発 学	飛田 守孝
タ ケ モ ト シ ジ 武 本 真 治	血液適合性酸化チタンゲルおよびリン酸カル シウムの創成と病因物質の選択的吸着	学 術	物 質 科 学	物 質 開 発 学	尾坂 明義
ヨ シ カ ミ オ 吉 川 満 雄	超精密加工のための基盤技術の開発研究	工 学	生 産 開 発 科 学	機 器 装 置 設 計 学	中島 利勝
テ シ マ ル シュゴ 弟 子 丸 俊 吾	Studies on Some Regulatory Factors for a Starfish Cyclin-dependent Protein Kinase (ヒト・サイクリン依存性プロテインキナーゼ の活性制御因子に関する研究)	工 学	生 物 資 源 科 学	生 命 機 能 設 計 学	虎谷 哲夫
タ カ ハ シ カ シ 高 橋 克 史	Studies on the actions of 1 , 25-dihydroxyvitamin D ₃ in inflammatory reactions involving neutrophils (好中球が関与する炎症反応に対する 1 , 25ジヒドロキシビタミンD ₃ の作用に関する研究)	工 学	生 物 資 源 科 学	生 命 機 能 設 計 学	大森 齊
カ ハ ル サムサク Kahar Sam sak	空気式アクティブサスペンションの省エネルギー 制御に関する研究	工 学	シ ス テ ム 科 学	設 計 ・ 制 御 学	則次 俊郎
カ ナ ケン カイ 韓 建 海	小型コンプレッサの開発とその応用に関する 研究	工 学	シ ス テ ム 科 学	設 計 ・ 制 御 学	則次 俊郎

氏名	学位論文名	専攻分野の名称	専攻名	大講座名	主査教授名
バンバン トリサクティ Bangbang Trisakti	単成分及び2成分系固気流動層内における粒子と気泡の動的挙動に関する研究	工 学	システム科学	設計・制御学	田中善之助
マツバ アキラ 松葉 朗	層状複合材料の疲労破壊特性に関する基礎的研究	工 学	システム科学	生産構成学	鳥居太始之
カヤキ ハリヤ 栢木 紀哉	段取作業の効率化を考慮した利益最大化スケジューリング	工 学	知能開発科学	知能展開学	宮崎 茂次
クロセ ヨシノ 黒瀬 義則	Studies on Abduction in Three-Valued Logic (3値論理における仮説推論に関する研究)	工 学	知能開発科学	人工知能基礎学	山崎 進
サトウ タカオ 佐藤 孝雄	Self-Tuning PID Controller Based on Model Predictive Control and Generalized Minimum Variance Control (モデル予測制御と一般化最小分散制御に基づく自己調整型PID制御則)	工 学	知能開発科学	人工知能基礎学	井上 昭
ムラカミ ジュンイチ 村上 純一	木構造フィルタバンクを用いたX線CTの再構成アルゴリズムに関する研究	工 学	知能開発科学	知識処理系開発学	森川 良孝
オオタニ コウゾウ 大谷 幸三	アレイ型センサ情報の知能化処理とその応用に関する研究	工 学	知能開発科学	知能展開学	正木 亮
グヤ シオン 顧 亜雄	油に対する気体の溶解・拡散現象のレーザー応用計測	工 学	エネルギー転換科学	エネルギーシステム学	鷲尾 誠一
キム ミンジュン 金 明 俊	マイクロカプセル潜熱蓄熱材混合水の水平伝熱円管内強制対流下における蓄熱・放熱特性に関する研究	工 学	エネルギー転換科学	エネルギーシステム学	稲葉 英男

授与月日:2002年3月25日

【論文博士】

氏名	学位論文名	専攻分野の名称	専攻名	大講座名	主査教授名
ナカオ ナオキ 中尾 直樹	光ファイバケーブルネットワークの運用と保守に関する研究	工 学	数理電子科学	情報通信システム学	古賀 隆治
チョキ リャン 曹 基 亮	最適化アルゴリズムによる超音波トランスジューサの最適指向性合成に関する研究	工 学	数理電子科学	情報通信システム学	古賀 隆治
カバシマ タケフミ 椛島 武文	ACサーボモータの有限要素法援用設計に関する研究	工 学	数理電子科学	電気電子システム学	高橋 則雄
イノウエ ヒロユキ 井上 浩行	マスタ支援による人間とロボットの協調制御に関する研究	工 学	基盤生産システム科学	知能機械システム学	則次 俊郎
スギハラ リョウスケ 杉原 良介	Studies on immunosuppressive polysaccharides isolated from some bacteria (細菌から分離された免疫抑制性多糖に関する研究)	工 学	生体機能科学	生体機能設計学	大森 齋

授与月日:2002年9月30日

【課程博士】

氏名	学位論文名	専攻分野の名称	専攻名	大講座名	主査教授名
マカリ マサキ 曲 正樹	Studies on the biological role of recombination activating gene products in the generation of new B cell repertoire in the periphery (末梢リンパ組織での recombination activating gene 産物による新規 B 細胞レパートワ形成の生理的役割に関する研究)	工 学	システム科学	設計・制御学	大森 齋
クボタ シンイチロウ 窪田 真一郎	レーザーを利用した微細加工技術に関する研究	工 学	基盤生産システム科学	機械製造開発学	宇野 義幸
キダ タカヒサ 木田 貴久	高分子吸着剤を塗布したハニカムの水蒸気吸着脱着特性及び除湿ローターへの適用に関する研究	工 学	エネルギー転換科学	エネルギーシステム学	稲葉 英男

授与月日:2002年9月30日

【論文博士】

氏名	学位論文名	専攻分野の名称	専攻名	大講座名	主査教授名
キムラ アキオ 木村 昭穂	ニューラルネットワークによる磁極形状最適化に関する研究	工 学	数理電子科学	電気電子システム学	高橋 則雄
ゴトウ ユウジ 後藤 雄治	鉄鋼材を対象とした電磁非破壊検査技術に関する研究	工 学	数理電子科学	電気電子システム学	高橋 則雄
ムネザワ ヨシオミ 宗澤 良臣	マテリアルリサイクルのための分解・分別手法に関する研究	工 学	基盤生産システム科学	知能機械システム学	大崎 紘一
ウチダ テツヤ 内田 哲也	剛直高分子の結晶および架橋体の構造に関する研究	工 学	物質分子科学	物質反応化学	酒井 貴志

[工学部の新たな教育方法への改組]

(1)JABEE本審査に向けて

平成 13年 1月 1日(日曜日)の午後から 2時半に渡って JABEEの実地試行審査が行われ、本学部の機械工学科、電気電子工学科およびシステム工学科の 3学科が同時に受審しました。

JABEEとは、「Japan Accreditation Board for Engineering Education」の略記であり、「日本技術者教育認定機構」の英名です。吉川弘之氏を会長とする民間団体で、法人および団体が構成員で、日本機械学会、電気学会、計測自動制御学会など 83の学協会からなっています。

JABEEの目的は「…統一的基準に基づいて高等教育機関における技術者教育プログラムの認定を行い、その国際的な同等性を確保するとともに、技術者教育の向上と国際的に通用する技術者の育成を通じて社会と産業の発展に寄与すること」とあります。教育プログラムとは、カリキュラムのみならず、教育方法、教育設備・環境、教員、教育成果などを含む全教育システムのことです。

JABEEの認定を受けるということは、その教育プログラムが「大ざっぱに言えば、その学科の教育が」世界的な水準にあると認められることです。世界的な水準にあることの保証は、技術者教育の質的な同等性を、国境を越えて相互に承認し合う協定に加盟することが必要です。その一つに、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、アイルランド、香港、南アフリカの 6国が加盟しているワシントン協定(WA)があり、日本(JABEE)は 2001年 6月に暫定加盟国として認められました。うまく行けば、2003年には本加盟が承認されます。製品の品質保証等に対し ISOという国際規格があることはご存じと思いますが、いってみれば技術者教育の品質保証の ISO版とでもいえます。

JABEE審査の受審にあたっては、まず、JABEE基準を満たすと考えられる教育プログラムを作ります。この教育プログラムが、JABEE基準を満たしているかどうかをプログラム作成側で判定し、自己点検書を作成し JABEEに提出します。このとき、基準を満たしているということを示す具体的な根拠(資料)を用意しておく必要があります。審査員は 3人で構成され(この他にオブザーバ 2人)、その内、企業からの人が 1人は含まれています。審査員は自己点検書を基に教育プログラムが基準を満たしているかどうかを審査するとともに、用意されている資料と教育現場を審査する、いわゆる実地審査を行います。審査項目は多岐に渡っておりますが、項目毎に審査評価が下されます。この個々の評価の中に、一つでも不可という判定がある場合には、他はどんなに良くとも、その教育プログラム全体が不可と判定され、認定されません。

学科の審査結果については「研究室、実験室が狭隘である」、「財源増強に努めるように」、「シラバスの書き方に改善を」等いくつかの指摘事項はありましたが、決定的に悪いという項目はありませんでした。

当該学科の学生諸君の JABEEに関する関心は高く、資格を得ることにより、卒業以上の何かを身につけたいという希望と、審査という一種の試験に自分の学科が落ちるわけにはゆかないという気迫が感じられ、真剣に対処していたことに強い印象を受けました。

なお、上記 3学科は、試行審査の結果を踏まえ、現在、本審査に向けて鋭意準備を進めており、それに伴う教育の改善に取り組んでおります。教育改善には卒業生の意向の反映ということが欠かせません。今後、いろいろな形で卒業生のご協力をお願いいたしますと思っておりますが、よろしくご協力下さい。

-岡山大学工学部 JABEE 実施 WG委員会-

(2)学習等達成度記録簿の導入(平成 13年度 新入生から実施)

平成 13年度から新入生(学科によって全学年)に対し、学習等達成度記録簿の導入が行われた。

これは、各学期の始めに、学生に学習等の目標をなるべく具体的に設定させ、次の学期の始めに、その結果がどうであったかをアドバイザー教員とともに記録していくものである。大学には入ったが、何となく 4年間を過ごしたというのではなく、学習等の目標を設定・確認させ、その達成度を自覚することにより学習等の効果を目指すものである。

平成 13年 1月に初めてのアドバイザー面接による記録簿記入が行われ、目標に対する成果の確認が行われ、さらに今年 4月に 2回目の確認が行われた。現在 2年目を迎えており、今後の成果が大いに期待される。以下に、記録簿の様式を示します。

学習等達成度記録簿

学習等達成度記録簿(その 1)									
学科名	学科	学生番号	09414	氏名					
出身地		出身高校							
住所	電話		固定	-					
	携帯		-						
	Eメール								
(1)大学 4年における勉学目標									
達成度評価・考察(注 2)					達成度評価・考察(注 2)				
取得目標(単位・数)					取得目標(単位・数)				
全体の達成度: %					全体の達成度: %				
教官(注 3)					教官(注 3)				
年 月 日 署名					年 月 日 署名				
(2)大学 4年における勉学以外の目標									
達成度評価・考察(注 2)					達成度評価・考察(注 2)				
取得目標(単位・数)					取得目標(単位・数)				
全体の達成度: %					全体の達成度: %				
教官(注 3)					教官(注 3)				
年 月 日 署名					年 月 日 署名				
(3)自己採点(各学年の春に、100点満点で自己採点を行ってください。入学時における大学生の平均を 50点と仮定します)									
場	目	入学時	2年	3年	4年	5年	6年	卒業時	
社会性・国際感覚が養成されたかどうか									
日本の固有文化に対する関心・知識の度合い									
倫理観・責任感が身に付いているかどうか									
物理・化学・数学・生物・情報等の工学に必要な基礎知識									
各学科に固有の基礎知識・技能									
問題とどこを見出し、それを分析し、解決していく能力									
文章表現力									
英語、その他外国語による表現力									
人前での発表能力									
人と話し合ったり議論したりする能力									
就職・進路への参加、委員会や学級委員長等学習など 大学以外での勉強等による自己啓発・生涯学習能力									
(4)資格(教員免許、TOEIC、危険物取扱者等)に関する目標 TOEIC等点数化したものについては、点数も記入してください)									
資格等名									
取得予定 (年月等)									
結果等 (年月、点数等)									

学習等達成度記録簿(その 2)									
昨前期 目標(注 1)					昨後期 目標(注 1)				
取得目標(単位・数)					取得目標(単位・数)				
達成度評価・考察(注 2)					達成度評価・考察(注 2)				
取得目標(単位・数)					取得目標(単位・数)				
全体の達成度: %					全体の達成度: %				
教官(注 3)					教官(注 3)				
年 月 日 署名					年 月 日 署名				
昨前期 目標(注 1)					昨後期 目標(注 1)				
取得目標(単位・数)					取得目標(単位・数)				
達成度評価・考察(注 2)					達成度評価・考察(注 2)				
取得目標(単位・数)					取得目標(単位・数)				
全体の達成度: %					全体の達成度: %				
教官(注 3)					教官(注 3)				
年 月 日 署名					年 月 日 署名				

上記様式により、3、4学年と続く

学習等達成度記録簿(その 4)

以下は、卒業時に書いてください。
(1)大学在学中における勉学目標の達成度

(2)大学在学中における勉学以外の達成度や成果

(3)その他、在学中を振り返っての感想(よかった点、悪かった点など)

(4)教官(アドバイザー)の意見

(注 1)「目標」には、その 10(3)自己採点にある項目に対する具体的な目標や勉学に対する目標を書く。授業以外のコンピュータ学習、読書、部活、クラブ、ボランティアなどについて書いてもよい。
(注 2)評価・考察と同時に各設定目標に対する達成度を%で表してください。
(注 3)「教官用」のこの欄は、教官(アドバイザー)の意見および署名用である。
指定されたときに記録簿を受け取り、指定された期日までに教官(アドバイザー)に返却してください。
毎年 4月、10月、および、卒業時に記録していただきます。
アドバイザーは、学生から受け取った際、目を通し意見を記入し、必ず署名(年月日も記入)してください。
個人の教育達成度を向上させるための記録です。結果は、全体的な教育達成度判定には利用されますが、個人の秘密は守られません。

(3)教育賞制度の導入(平成 13年度から実施)

工学教育の充実・発展を図るため、「学業及び人物に優れた学生」及び「工学教育振興及び奨励に顕著な業績を挙げた者」等を表彰することを目的として、平成 13年 1月に岡山大学工学部表彰内規を制定し、既に 2回の表彰を行った。

1)優秀学生賞

この優秀学生は、学部学生は学科から 1名ずつを推薦、大学院博士前期課程は各系から 1名ずつ推薦された者について選考を行い、卒業式当日に、大会議室にて優秀学生賞授与式を挙行政した。

過去 2回の受賞者は、次のとおりです。

第 1回(平成 13年 3月 2日)

学部学生(平成 13年 3月卒業者)

機械工学科 武内 秀樹
精密応用化学科 草場 敏彰
電気電子工学科 阿達 孝之
情報工学科 安井 隆
生物機能工学科 稗田 直樹
システム工学科 藤井 信二郎

大学院自然科学研究科博士前期課程(工学系)学生(平成 13年 3月修了者)

機械システム工学専攻 福田 剛巳(機械系)
物質生命工学専攻 井上 智博(精密応用化学系)
電子情報システム工学専攻 西井 良和(電気電子系)
電子情報システム工学専攻 今井 慎(情報系)
物質生命工学専攻 河野 洋平(生物機能系)
機械システム工学専攻 植田 清隆(システム系)

第 2回(平成 14年 3月)

学部学生(平成 14年 3月卒業者)

機械工学科 松下 俊介
精密応用化学科 宮原 成司
電気電子工学科 安藤 昌和
情報工学科 坂井 孝江
生物機能工学科 藤堂 景史
システム工学科 光峰 祐規

大学院自然科学研究科博士前期課程(工学系)学生(平成 14年 3月修了者)

機械システム工学専攻 桂 敏夫(機械系)
物質生命工学専攻 久保田 潤(精密応用化学系)
電子情報システム工学専攻 大西 拓馬(電気電子系)
電子情報システム工学専攻 山本 康晴(情報系)
物質生命工学専攻 西川 裕美子(生物機能系)
機械システム工学専攻 元山 俊(システム系)

2)教育貢献賞

この教育貢献賞は、工学部に勤務する教員及び工学部教職員を対象とし、各学科及び教職員の推薦に基づき選考の上、定例教官会議で授与式を行った。過去 2回の受賞者は、次のとおりです。

第 1回(平成 13年 3月)

平成 11年度電気電子工学科「物理学実験」担当グループ 代表 小笠原 悟司 助教授

受賞理由: 電気電子工学科 1年次の専門基礎科目である「物理学実験」の自学科による開講のための企画及び運営にあたり、1年の準備期間を経て、学生の理解度の向上や教官と学生間のコミュニケーションが円滑になるなどの大きな効果をあげた。また、アンケート結果をフィードバックして内容の充実にも努めており、この事例は日本物理学会「大学の物理教育」でも紹介された。

システム工学科 講師 高岩 昌弘 助手 平嶋 洋一 助手 宗澤 良臣 助手 永井 伊作

受賞理由: 上記教官グループは、学生実験、工作実習を通じてシステム工学科学生に対する創成科目教育に多大な貢献があった。特に、学生実験用ロボットの開発、ロボットコンテストの企画、各種実験設備の開発等を行いシステム工学科学生に対して、もの造り(デザイン)教育を積極的に実施した意義はきわめて大きく、外部に対して成果を公表している。

機械工学科 教授 鷲尾 誠一

受賞理由: 平成 9年から、「8大学工学教育プログラム検討会」に参画し、工学教育プログラム検討委員会委員として工学教育の改革に関する検討に参画するとともに、本学部に「創成科目」及び「達成度判定」に関する概念を導入し、工学教育の改革の方向性を示した。

物質応用化学科 教授 田中 善之助

受賞理由: 教育内容の国際化への対応のため設置された「日本技術者教育認定機構(JABEE)」の化学系の審査委員として、本学部で最初に選任され、日本最初の認定の試行に参加するとともに、本学部の JABEEへの取り組みに協力した。

第 2回(平成 14年 3月)

機械工学科 教授 山本 恭二

受賞理由: 日本技術者教育認定機構(JABEE)の試行審査を受けるに当たって、機械工学科のプログラム責任者として、教育プログラムを整備充実し、機械工学教育の改革の方向性を示した。

電気電子工学科 教授 高橋 則雄

受賞理由: 電気電子工学科の教育プログラムの自己点検と教育改善運動におけるリーダーシップと、JABEE審査試行でのプログラム責任者として取り組み、教育改善等に大きな成果を挙げた。

電気電子工学科 助手 藤森 和博

受賞理由: 電気電子工学科での学生実験改善と教育環境改善に当たり、PC計測・制御モジュールシステムを導入するとともに、実験内容等を大幅に改良した。その際、システム導入では中心的な役割を果たし、また平成 13年度電気情報関連学会中国支部第 52回連合大会での報告発表に対し、電気学会論文発表賞 Bを授与されるなど顕著な業績を挙げた。

生物機能工学科 教授 齋藤 清機

受賞理由: 全学的な教育改善プログラムを提案し、平成 11年の学長補佐就任以来、常に先頭に立ってリーダーシップを発揮し、学生の真の知力向上を図ることに情熱をかたむけ、英語教育の改善に大きな成果を挙げ、さらに、現在は学士教育の再構築に取り組んでいる。

システム工学科 教授 井上 昭

受賞理由: 多方面からの意見を踏まえて、常に教育レベルを高めてより良い教育を円滑に実施するための教育システムの構築と運営に携わり、特に、JABEEの試行審査の受審においては、システム工学科のプログラム責任者としてリーダーシップを発揮し、教育システムの改善等に多大なる貢献があった。

[工学部学生定員及び現員]

学科	年度	11	12	13	14	合計	現員の計
機械工学科		85	80	80	80	325	37(5) [25]
物質応用化学科		60	60	60	60	240	28(50) [20(7)]
電気電子工学科		85	60	60	60	265	33(11) [13]
情報工学科		80	60	60	60	260	30(24) [2]
生物機能工学科		80	80	80	80	320	33(104) [5(3)]
システム工学科		80	80	80	80	320	36(20) [6]
通信ネットワーク工学科			40	40	40	120	13(16) [3]
第 3年次編入学		30	30			60	
計		500	490	460	460	1910	2,11(247) [74(10)]

() は女子で内数。[] は第 3年次編入学で外数。

[同窓会会計報告(平成 13年度)]

岡山大学工学部同窓会の平成 13年 4月 1日から平成 14年 3月 31日までの平成 13年会計年度の決算を報告いたします。
同窓会会計は一般会計と特別会計に区分されており、一般会計は会の中心的会計として入会金収入を基とし、会の運営経費の全てを含んでおります。特別会計は同窓会の記念事業費として一般会計と区分して管理しております。

一般会計

収支計算書

平成 13年 4月 1日から平成 14年 3月 31日まで (単位:円)

科 目	予算額	決算額	差 異	備 考
I. 収入の部				
1. 入会金収入 会費収入	3,386,000	3,257,130	128,870	328名 @ 9,940× 9 @ 9,930× 319
2. 寄付金収入 寄付金収入	0	2,000	2,000	名 1口
3. 雑 収 入 受取利息	9,000	7,615	1,385	普通、郵貯、MMF、 国債F
同窓会名簿代	0	425,000	425,000	名簿 @ 5,000× 85
当期収入合計(A)	3,395,000	3,691,745	296,745	
前期繰越収支	7,412,944	7,412,944	0	
差額収入合計(B)	10,807,944	11,104,689	296,745	
II. 支出の部				
1. 事業費 通信運搬費	642,000	668,448	26,448	入会案内、会報、名簿外郵送料
会 議 費	150,000	121,973	28,027	学科連絡委員会
印刷製本費	1,153,000	1,063,715	89,285	入会案内、会報、封筒外
助成金支出	100,000	0	100,000	
消耗品費	10,000	6,258	3,742	コピー用紙、ゴム印
雑 費	10,000	21,315	11,315	生花
名簿代同窓会負担額	3,000,000	3,000,000	0	名簿代
2. 学科事業費 学科配分会費	512,000	492,000	20,000	328名 @ 1,500-
3. 管 理 費 業務委託費	360,000	360,000	0	財 岡山工学振興会
4. 予 備 費 予 備 費	150,000	0	150,000	
当期支出合計(C)	6,087,000	5,733,709	353,291	
当期収支差額(A)-(C)	2,692,000	2,041,964	650,036	
次期繰越収支差額(B)-(C)	4,720,944	5,370,980	650,036	

基金特別会計

収支計算書

平成 13年 4月 1日から平成 14年 3月 31日まで (単位:円)

科 目	決算額	備 考
I. 収入の部		
1. 雑 収 入 受取利息	6,785	公社債投資, MMF
当期収入合計(A)	6,785	
前期繰越収支差額	2,495,870	
収入合計(B)	2,502,655	
当期支出合計(C)	0	
当期収支差額(A)-(C)	6,785	
次期繰越収支差額(B)-(C)	2,502,655	

[工学部同窓会ホームページリニューアル!]

世のネットワーク化の波に乗り、工学部同窓会でも従来のホームページを一新します! どうぞみなさん見に来て下さい!!

工学部同窓会 URL <http://www.eng.okayama-u.ac.jp/alumni/index.htm>

11月中旬運用開始のホヤホヤで~す!

- ・ 頻繁な更新を目指します。ちよくちよく見に来て下さい。
- ・ 見て楽しい、読んで楽しいホームページにするためにみなさんのアイデアを募集しています。どしどしご意見・ご提案をお寄せ下さい。
- ・ 工学部同窓会ホームページから同窓生の方々がお持ちのホームページにリンクを張らせていただきたいと思ひます。ホームページをお持ちの方、是非ご連絡下さい。
- ・ 同時に同窓会報をメールで発行することを計画しています。これまで年 1回発行の同窓会報をメールではもっと頻繁にお届けしようと計画しています。メールで同窓会報を受けとらうと思われる方、メールアドレスを教えてください。

これらの件の連絡はすべて ofst@ccokayama-u.ac.jpまでお願いします。

工学部同窓会ホームページメニュー

同窓会から	同窓会報
<ul style="list-style-type: none"> ・ 代表幹事挨拶 ・ 工学部同窓会について ・ 同窓会規約 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今号の記事 記事その 1 記事その 2 ・ バックナンバー
近況報告	
各学科から	<ul style="list-style-type: none"> ・ 機械工学科 ・ 情報工学科 ・ 通信ネットワーク工学科 ・ 物質応用化学科 ・ 生物機能工学科 ・ 電気電子工学科 ・ システム工学科
写真館	
事務局より	Link
<ul style="list-style-type: none"> ・ 支部活動の助成について ・ 同窓会報への寄稿などのお願ひ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 工学部 ・ 各学科 etc..